The Japan Lung Cancer Society

支　部　活　動

九州支部

□第19回
日本肺癌学会九州支部会

昭和56年6月12日(金)
沖縄県労働福祉会館
当番幹事　正　義之
(琉球大学第1外科)

特別講演

沖縄県における肺癌診療の現況

国立療養所沖縄病院外科
源河圭一郎

沖縄県では昭和53年以来、全国で初めて男子の肺癌による死亡者数が胃癌のそれを上廻った。昭和54年の沖縄県男子の悪性腫瘍による死亡者583人中，肺癌21.4%，胃癌19.7%，食道癌12.0%，肝癌8.4%であり，女子では424人中，子宮癌13.4%，胃癌12.0%，肺癌9.7%，肝癌8.3%，乳癌4.7%であった。

今回の調査は昭和42年から昭和55年までに経験した原発性肺癌740例を対象にした。男女共に60歳台にもっとも症例が多く、性比は男3.2対女1であった。70歳以上の高令者肺癌は30%を占めた。

初診時すでにIII期以上の進行肺癌が75%を占めた。全症例の36.2%は保健所を中心とする胸部X線集団検診で発見されているが，この中には進行肺癌も多く含まれている。しかし集検発見群には自覚症状発見群の3倍のI期肺癌が含まれていた。

病理組織型は1960年代では扁平上皮癌と腺癌の頻度はほぼ同じであったが，最近では扁平上皮癌は腺癌の約2倍の頻度である。

最近3年間の切除率は37.4%である。切除例の予後は，腺癌が扁平上皮癌より良好であった。扁平上皮癌が多く含まれる中心型肺癌の発見が遅れがちであることが，その主な理由と思われる。

1．胸部X線上興味ある経過を示した肺胞上皮癌の1例

国立大分病院呼吸器科
福島　純，桑原哲郎，宮崎泰弘
甲斐隆義

中枢気管支に閉塞がないのに罹患葉の無気肺を来たした肺胞上皮癌症例を報告した。経過を振り返ると，4年前には間質性肺炎様の粒状網状陰影であったが，陰影が増強するにつれ罹患葉の含気が減少し，遂には無気肺様となったことがわかり，興味が持たれた。

2．肺小細胞癌の胸部X線像の解析

鹿児島大学放射線科
小野原信一，小山隆夫
園田俊秀，豊平　謙，吉村　広
伊東祐治，篠原慎治，牧野孝昭
国療南九州病院
瀬ノ口頼久，乗松克政

肺小細胞癌30例のX線像を検討した結果，その特有の進展様式を反映して，①肺の含気不全・容積縮小，②広汎な気管支肥厚像や狭窄像，③肺門部リンパ節腫瘤影等が特徴的所見と考えられた。

3．前縦隔腫瘍における内胸動脈造影の有用性について

鹿児島大学放射線科　小林尚志
小山隆夫，中釜秀樹，園田俊秀
伊東隆碩，牧野孝昭，篠原慎治

検討対象は病理学的確診の得られた前縦隔腫瘍の29例50像であり，内訳は胸腺腫10例，奇形腫7例，転移性腫瘍6例，胸郭内甲状腺腫，悪性リンパ腫その他6例が含まれる。これらの内胸動脈造影像について，内胸動脈本幹拡張，胸腺枝の異常，主栄養血管の同定及びその数等を検討し，ある程度の質的診断が可能と考えられた。

4．肺癌における縦隔・肺門部のCTについて

国立指宿病院放射線科
植木幸二
鹿児島大学放射線科
大久保幸一，島袋国定
坂田博道，伊東祐治，篠原慎治

手術例26例を含む原発性肺癌93例(昭和54年6月～56年5月)を対象に，CTによる縦隔・肺門リンパ節の検出能を従来の断層像及び^{67}Gaシンチと比較し，又，手術例26例については，CTによる縦隔リンパ節の部位別・大きさ別検出能を手術所見・組織学的所見と比較検討し報告した。

5．肺癌に対するRI検査の検討

鹿児島大学放射線科　大山三郎
小野原信一，瀬ノ口頼久

NII-Electronic Library Service

The Japan Lung Cancer Society

九州支部

中條政敬，篠原慎治
国療南九州病院内科
福永秀智，乗松克政
同　外科　入来敦久，江川勝士

原発性肺癌79例に対するRI検査は進展範囲転移の有無などの検索に有用．1．^{67}Gaシンチ：47/60に集積⊕．無気肺胸水型15/19に集積⊕．リンパ節集積では1/1で手術所見と一致．2．肝シンチ：SOL⊕1/69．3．骨シンチ：集積⊕15/68．

6．肺癌患者の血清CEA値の検討

国療沖縄病院外科　石川清司
源河圭一郎，国吉真行
長嶺信夫，宮里恵三郎
同　内科
久場睦夫，大宜見辰雄

肺癌患者の治療開始前血清CEA値について検討した．全症例に対する陽性率は70.8%で，扁平上皮癌症例で82.8%の高い陽性率を示した．治療開始前血清CEA値が50ng/ml以上の異常高値を示した症例の予後はきわめて不良であった．

7．肺癌患者における免疫学的パラメーターの検討

国療沖縄病院内科
久場睦夫，大宜見辰雄
具志堅政道，大城盛夫
同　外科　源河圭一郎
石川清司，国吉真行
宮里恵三郎，長嶺信夫
琉球大学医学部附属病院中検
外間政哲

癌患者の免疫能は，一般に低下しているといわれており，肺癌治療に際して，病巣の進展程度を知る事はもとより，担癌宿主の免疫応答を把握する事が，治療法の選択，病勢の推移，予後との関連から重要視されている．

我々は，肺癌患者において，免疫学的パラメーターとして，末梢リンパ球数，PPD，PHA，DNCB皮内反応，免疫グロブリン，補体等の測定を行っているが，これら指標と病期，治療，予後等との関連について検討を行ったので，若干の考察を加え報告する．

8．肺癌切除例の皮内反応からみた術前後の免疫動態の検討

産業医科大学第2外科
村上　勝，永田真人
小田桐重遠，川原英之
石倉義弥，吉松　博

肺癌をはじめとする胸部外科領域疾患の術前後にPHA・PPD皮内反応の変動をみた．切除群肺癌と非切除群肺癌との術前値に有意差をみとめず，術後1週目には各疾患で反応性低下がみられたが，術後の4週目では肺癌，食道癌症例のみ反応性の回復をみなかった．

9．1側胸膜肺全摘を併用した悪性胸腺腫の1手術例

国立大分病院呼吸器科
宮崎泰弘，桑原哲郎，福島　純
甲斐隆義

1側胸膜播種性転移をともなった悪性胸腺腫に対し，原発巣の切除と同時に1側胸膜肺全摘を施行した．切除標本より胸膜播種転移巣と胸膜の関係を検すると悪性胸腺腫の胸膜播種転移に対するこのような術式は有用であると考えた．

10．気管支内軟骨腫の1例

熊本中央病院内科
衛藤安広，絹脇悦生
同　病理研究科　大塚陽一郎
国療再春荘外科
岩崎健資，松浦憲司

症例は60才女性で自覚症状はなく，胸部正面像で左S_3に二次陰影を伴った円形陰影を認めた．内視鏡的にS^3a入口部を閉塞するPolypoid tumorを認め，生検にて軟骨腫を強く疑い左上葉切除施行した．組織学的にLiebowの診断基準による軟骨腫であった．気管支内軟骨腫は文献上本邦では9例目と思われる．

11．肺のmalignant fibrous histiocytoma

福岡大学第2外科
白日高歩，田中英徳，蒲池　寿
同　内科　宮原智子，吉田　襟
同　整形外科　葉　山泉
同　病理　岩崎　宏，栄本忠昭

肺のmalignant fibrous histiocytomaの本邦第1例を報告した．70才女性で肺原発腫瘍であり，定型的なstoriform patternと多数の巨細胞が観察された．他に46才の女性で後腹膜腔発生後，肺転移を示した症例も併せて報告した．

12．肺癌にPneumocystis carinii を併発した一剖検例

長崎大学第2内科　今村由紀夫
植田保子，神田哲男，岩崎博圓
泉川欣一，原　耕平

症例は76才男性．主訴は咳，血痰，左S^3に腫瘤を認め生検にて小細胞癌と診断，放射線とV-EMPの併用療法で部分寛解を得た．治療後2週頃から発熱，呼吸困難が出現　胸部レ線上びまん性網状粒状陰影を認め，治療に抵抗して呼吸不全で死亡．剖検でPC肺炎と診断した．

13．肥厚性骨関節症と尿中カテコーラミン排泄増加を伴った肺癌の1手術例

産業医科大学第2外科
永田真人，小田桐重遠
川原英之，村上　勝，石倉義弥
吉松　博
同　第2内科　小野　明

69才男性の肺腺癌例で術前，肥厚性骨関節症，太鼓指，女性

NII-Electronic Library Service